

## 令和7年度 京都美術工芸大学外部評価委員会 評価結果報告書

1 日時 令和7年11月18日(火) 13時30分～15時40分

2 場所 京都美術工芸大学 南館1階 S101

### 3 テーマ

1. 京都美術工芸大学の内部質保証について
2. 通信教育課程の設置計画について
3. その他

### 4 委員

委員長	京都伝統工芸大学校 校長	新 谷 由貴代
委員	京都大学大学院工学研究科建築学専攻 教授	小 椋 大 輔
委員	京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科建築学専攻 教授	金 尾 伊 織
委員	学校法人塚本学院理事・大阪芸術大学短期大学部事務局長	工 藤 皇
委員	京都市総合企画局国際都市共創推進室 大学連携推進課長	上 田 久 文

### 5 開会

冒頭、司会より委員紹介、大学関係者紹介、資料の確認が行われた。

続いて、理事長よりあいさつがあり、その後、竹脇学長より大学概要説明が行われた。審議開始に当たり、本委員会の委員長は、外部評価委員会規程に従い、学長が委員長を指名することとなっている旨の説明があり、新谷由貴代委員が委員長に指名され、審議を開始した。

新谷委員長から、「令和6年度自己点検・評価報告書」は、公益財団法人 日本高等教育評価機構が定める認証評価の基準1から基準6に基づき作成されている旨の説明があり、各委員から、順次、意見、質問等が述べられた。

### 6 外部評価委員からの意見・提言

小椋委員：

卒業時アンケートによる回答率が悪いと記載されているが、令和5年度から令和6年度の間には改善された点や機能した点をお聞きしたい。また、就職された方を対象とした追跡アンケートの実施はされていますでしょうか。

大学側：

卒業時アンケートは2年前から実施しています。実施日については、卒業認定後の卒業時に行っているため、回答率を高める工夫が必要であると考えています。学生の満足度向上に向けては、学生と教員の距離を近づけることや、学生に対する様々な支援を行っています。また、合理的配慮の学生、資格取得や就職支援においてサポート体制を強化することで満足度の向上に努めています。なお、追跡アンケートの実施については現在、同窓会組織の歴史が浅いため、実施には至っていません。今後、5年後、10年後に追跡調査を実施したいと考えています。

小椋委員：

データサイエンス・AI 教育プログラムを申請されたということですが、メディアリテラシーや生成 AI を大学内でどう捉え、どう活用されていますでしょうか。また、Python やプログラミング言語などを既に学んでいる学生も多い中でどう活用していくかもお聞きしたい。

大学側：

データサイエンス・AI 教育プログラムについては令和 7 年度に申請し、本年 8 月に認定されました。令和 7 年度申請時には生成 AI に関してはプログラム内容として必須ではなかったのですが、今後プログラム科目の中で適切な時期にカリキュラムに取り入れる予定です。また、生成 AI の利用に関して指針を定めホームページなどにアップし、学生に周知しました。来年度からは学生便覧にも掲載する予定です。本学の入学生はある程度の情報を学んできていますが、ばらつきがあるので基礎知識から扱っています。建築学部ではコロナ禍より低学年から BIM を使用しています。芸術学部では Adobe や Animation を生むソフトなどを教育に組み込んでいます。

小椋委員：

昨今、ジェンダーバランスが言われているが貴学のような美術系の大学ではどういった割合かお聞きしたい。

大学側：

本学学生に関しては、芸術学部では男女比が 4 : 6 で女子学生が多いです。建築学部はその逆で 6 : 4 になるため、男女のバランスはとれているのではないかと思います。教員に関しては、以前は男性教員が多かったのですが、女性教員のゼミに入りたいとの声が多かったので女性教員を増やし配慮しています。

小椋委員：

通信教育課程について教職員の適切な配置で負担軽減が重要になってくると思います。現在考えておられる対応環境についてはいかがでしょうか。

大学側：

令和 8 年 3 月に設置計画書の提出予定です。現在、設置している建築学部、芸術学部の通学課程の授業科目を通信教育課程でも開設する計画のため、教員の負担が増えてくることもあります。増える負担の緩和策として指導補助者を各授業科目に配置し、負担軽減を考えています。指導補助者に関する内規を定め、シラバスなどに示していく予定です。通信専門の教員や職員についても増やすよう準備をしています。また、グループ校一体となって指導補助者を確保していく予定です。

金尾委員：

通信教育課程においてデザイン、建築という特徴の中、対面で指導しなければならない場面ではどのように対応されますか。

大学側：

夏季集中などのスクーリングを中心に、対面授業をグループ校の専門学校を設置している園部キャンパスで実施していく予定です。建築学部では、座学を事前学習として行い、スクーリングを1～2日間で実施できるよう調整しています。

金尾委員：

芸術学部と大学院は定員割れしている年がある。今後の学生確保についてお聞きしたい。

大学側：

芸術学部については、入学辞退が多くありました。今後はそれを見込んで合格者を決めていく必要があると思います。また、本学の魅力を広く伝えていき、満足度を高め、在学生の退学を減らしていくことが大事だと考えます。

本学大学院は6年間で研究と一級建築士の資格を目指すことを趣旨として設置しました。設置当初は本学の大学院の魅力がうまく伝えられていなかったが、学部入学時より6年間の学びを意識し入ってくる学生が増えたので大学院の希望者が増えたのだと考えています。また、海外との交流が増えたため、海外からの受験者も増えています。今後は国際化に関しても発展させていきたいと考えます。

金尾委員：

様々な入試種別があるが入学試験による学力差はどの程度か。授業についていけない学生や退学する学生にはどう対応しているか。また、アンケートや教育懇談会をどう活用しているかお聞きしたい。

大学側：

入試種別による学力の差は一定程度認められますが、その学力に教員が合わせて指導しています。本学は担任制を取り入れ、丁寧な指導や相談室の充実を図っています。また、退学について重要な問題だと認識しています。今年度より退学対策として「初年次セミナー」の授業科目を新設しました。こちらの授業では友達ができない、大学のルールがわからない等の対策として行っています。PROGテストも取り入れて社会人基礎力の測定も行っています。今後、分析を進め退学防止につなげていきたいと考えています。

金尾委員：

学生の研究活動費の充実や学外との研究活動の協力について具体的にどう計画されているのでしょうか。

大学側：

これまでは、大学院生が多くなかったので研究より教育が主体になっているのが実状でした。近年、外部資金を受け入れて、建築学部では京都府住宅供給公社との共同研究である堀川団地再生計画などを、芸術学部では商品開発などを行っています。施設としては、研究棟の設置を予定しています。今後、科学研究費など、外部資金の獲得を目指していきます。

委員長：

工藤委員からは事前にご意見書をお送りいただいています。改めてご意見をお願いします。

工藤委員：

「大学職員の人員配置等を含む事務局体制」、「自己点検・評価の実施方法と強化の見直し」、「大学 IR 専門部会における情報収集と分析の推進の実質化について」、これらの日本高等教育評価機構の指摘事項がどのように活かされたかお聞きしたい。

大学側：

人員配置を含む事務局体制については十分な配置をされていると思いますが、今後どんな事務体制にしていくかは過渡期であると考えます。自己点検・評価の正確性を高めるため、今年度より全教職員が各委員会資料を閲覧できるようにしました。大学 IR 専門部会は令和 5 年度に立ち上げましたが、どう活用していくかはまだ課題が残っています。今は情報収集段階であり、十分な分析ができていないため、今後、専門家に入ってください大学 IR 専門部会の分析結果の活用を進めていきたいと考えています。

工藤委員：

(1) 委員会体制の見直し、(2) 大学 IR で調査した結果を活用する体制の整備、(3) アドミッション・ポリシーに沿った学生が入学しているかの評価・検証について、(4) 教職員の能力向上、(5) ICT 活用を前提とした授業内容の改善と充実について、現在の取り組み状況または取り組み方針についてお聞きしたい。

大学側：

(1) 委員会体制の見直しについて、1 回目の認証評価時に委員の数が多すぎると指摘がありました。改善として参加せず情報を共有することで改善を図りました。(2) 1 年生の前期末での退学が目立ったため、大学 IR 専門部会において分析を行いました。大学での学び方を知らないまま入学している学生が多いという分析から、今年度より「初年次セミナー」を開設しました。(3) アドミッション・ポリシーと入学生の評価と検証は充分に行えていないのが現状です。専門家の方に入ってくださいことでより改善をすすめていきます。(4) 年に 2 回、目標を定める教職員面談を実施しています。各教職員が提言や提案も出し、吸い上げる体制を整えています。(5) 全科目の Classroom を立ち上げ、出席確認や課題の提出などうまく活用できていると思っています。今後も内容の充実や改善を図っていきます。

工藤委員：

通信教育課程に関しての意見は、芸術学部及び建築学部とも養成する人材像が明確に示され、関連する資格取得は大変魅力的である。通信教育課程ならではの教育システムが整備され、開設が大いに期待できる。

上田委員：

京都市には 36 大学があり、約 15 万人の学生がいる中で、他大学との共同研究、大学間の連携につい

て今後どのように力をいれていくかお聞きしたい。

大学側：

昨年度1月に京都市立芸術大学、京都工芸繊維大学、本学とで三大学連携協定を結びました。昨年度3月には伝統工芸・伝統建築・文化というテーマでイベントを開催しました。芸術学部は京都市交通局の駅ナカアート、四条通の地下通路、バスマップのアプリなどの参加大学と協力し交流しています。文化財情報デザインコースでは祇園祭で巡行する鷹山鉾の懸魚や鱧を京都伝統工芸大学校と合同でデザイン提案や製作をしたり、寺社での展示会や保全修復を行っています。建築学部では、8大学が協力し、市営住宅のプロジェクトを進めています。

地域貢献に関しては、夏祭りや運動会、七条大橋の清掃活動で協力し、京都市には「京都学」の授業で、京都の特色や魅力をご講義いただいています。また、本年度の産学連携では、約300名を収容する教室が満席となる規模のシンポジウムを開催いたしました。

上田委員：

昨今の学生は授業やアルバイトで忙しく、課外活動や学外などで学ぶ機会が少なくなっていると聞く。歴史や文化、伝統が息づく京都のまちに触れることによって得られる学びも多くあると考えますが、学生の自主的な活動に対する支援についてどうされているのでしょうか。

大学側：

芸術学部では駅ナカアートや商品開発などの試せる環境下でチャレンジしたい学生が多く、自主的に学ぼうとする姿勢が見られます。建築学部では「京都学演習」などの授業の一環として地域に出向くことで、学生が地域の方々と顔見知りになり、新たなつながりも生まれています。

上田委員：

学生の進路・就職に関する状況として、京都での就職を希望する学生に対する取組があればお聞きしたい。

大学側：

先日、授業の一環として京都市若者支援センターの協力を得て、京都市の約8社の企業に来ていただきご紹介いただきました。また、学生には伝統工芸やデザインの分野の求人をリスト化し、情報提供を行っています。京都にはマッチする求人がなかなか見つからないとの声も上がってきています。

上田委員：

学生確保の観点から、留学生の受け入れに関する今後の方針についてお聞きしたい。

大学側：

サポート体制が整っていなかったので留学生は受け入れない方針であったが、面接をすることで少数だが優秀な学生を確保することができました。学生確保については受け入れ体制が整ってからだと考えています。

委員長：

貴重なご意見、ご提言をいただき、また議事進行にご協力をいただき感謝いたします。誠にありがとうございます。

## 7 閉会

閉会に当たり、新谷副学長から、外部評価委員会でのご意見・ご提言に対する謝辞が述べられ委員会を閉会した。委員会閉会后、希望される委員に対して学内施設の見学が行われた。

以上